弘前大学教育学部紀要　第105号：47～63（2011年３月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 105：47～63（Mar. 2011）

正法眼蔵『諸法実相』
Shōbō-Genzō “SHOHŌ-ZISSŌ”

矢　島　忠　夫*
Tadao YAJIMA*

要　旨

本考は、『正法眼蔵』を精読する。とりわけ、論理語に留意し、道元がどのように思考していたのか、その流れが理解できるように表現することを目指す。修正可能な素案を提示することが課題である。

キーワード：唯仏与仏乃能究尽諸法実相、生死去来真実人体、尽十方界真実人体、杜鵑鳴山竹裂

「それ自身と同一の実体的なものが存在しているのではなく、それ自身と差異する非実体的な出来事が生起している」と考えられるなら、「行為するものが、行為や、その行為において生起する出来事と、一つの出来事である」ことも理解されるだろう。

「諸法実相」は、クマーラジーヴァ（鳩摩羅什）漢訳『法華経』方便品の「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相、所謂諸法、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等」に由来し、「仏だけが仏のために、諸法の実相を究め尽くすことができるのである。つまり、［仏だけが仏のために］存在するものたちのこのような（実相である）相、このような（実相である）性、このような（実相である）体、このような（実相である）力、このような（実相である）作、このような（実相である）因、このような（実相である）縁、このような（実相である）果、このような（実相である）報、このような（実相である）本末究竟等［を究め尽くすの］である」と読まれることがある。

しかし、この『諸法実相』（1243）では、「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相」は、「唯仏が与仏であることが、諸法が実相であることを、究め尽くすことができる」（仏だけが仏のためにあることが、［現に］存在しているものが真実の在り方であることを、究め尽くすことができる）と読まれ、「諸法実相の真の意味は、唯仏与仏にある」（によって解明される）（において実現する）と理解するようである。それは、「［現に］存在しているものが真実の在り方なのである、［現に］存在しているものを離れて真実の在り方を求めてはならない」ということは、「仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることの実証が実現しているのである。仏道修行を離れて、仏であることの実証を求めてはならない」ことを意味している、と言うのだろう。

存在論的（実体論的）な「諸法実相」（十如是）を、行為論的（生起論的）な「唯仏与仏」へと接続する根拠を示そうとするようである。

如浄の「杜鵑啼、山竹裂」も、仏道修行（孤雲の上の杜宇の一声）と一つのこととして仏であることの実証（山竹裂）が生起している、と理解するようである。

『仏性』（1241）でも、「一切衆生悉有仏性」が、「一切の衆生は悉く仏性を有している」ではなく、「一切の衆生は悉有であり、悉有は仏性である、ゆえに、一切の衆生は仏性である」と読まれ、「仏道修行するすべてのもの（衆生）は、仏道修行しているその行為において生起しているすべての出来事（悉有）と別のものではなく、その出来事（悉有）が、仏である証し（仏性）である」、したがって、「仏道修行するその行為こそが、仏である証しであり、仏道修行する行為のほかに、仏である証しはない」と理解される。(1)

『現成公案』（1233）も、「現成が公案である」と読まれ、「公案は実現している」、「実現しているものが公案である」、「存在するものは現にある在り方そのものにおいて真実の在り方を実現している」、「仏道修行するものは、その行為においてすでに、仏であることを実証している」と理解するようである。

＊弘前大学教育学部社会科教育講座
Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

1　『法華経』における諸法実相

［1-1-A］仏祖の現成は究尽の実相なり。実相は諸法なり。諸法は如是相なり、如是性なり。如是身なり、如是心なり。如是世界なり、如是雲雨なり。如是行住坐臥なり、如是憂喜動静なり。如是拄杖払子なり、如是拈花破顔なり。如是嗣法授記なり。如是参学辦道なり。如是松操竹節なり。(2)

［1-1-B］仏祖が実現していることが真実の在り方が究め尽くされていることです。真実の在り方とは［現に］存在するものたちのことです。［現に］存在するものたちがこのような（実相である）在り方なのです、このような（実相である）性質なのです。このような（実相である）身体なのです、このような（実相である）心なのです。このような（実相である）世界なのです、このような（実相である）雲であり雨なのです。このような（実相である）行や住であり坐や臥なのです、このような（実相である）憂や喜であり動や静なのです。このような（実相である）杖であり払子なのです。このような（実相である）［釈尊の］拈花であり［摩訶伽葉の］破顔なのです。このような（実相である）嗣法であり授記なのです。このような（実相である）参学であり辦道なのです。このような（実相である）松の操（変わらぬ緑）であり竹の節目（仏道修行の節操）なのです。(3)

［1-1-C］「諸法実相」は、クマーラジーヴァ（鳩摩羅什）(344-413) 漢訳『法華経』方便品の「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相、所謂諸法、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等」に由来し、「仏だけが仏のために、諸法の実相を究め尽くすことができるのである。つまり、存在するものたちのこのような（実相である）相、このような（実相である）性、このような（実相である）体、このような（実相である）力、このような（実相である）作、このような（実相である）因、このような（実相である）縁、このような（実相である）果、このような（実相である）報、このような（実相である）本末究竟等［を究め尽くすの］である」と読まれることがある。

しかし、この『諸法実相』(1243) では、「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相」は、「唯仏が与仏であることが、諸法が実相であることを、究め尽くすことができる」（仏だけが仏のためにあることが、［現に］存在しているものが真実の在り方であることを、究め尽くすことができる）と読まれ、「諸法実相の真の意味は、唯仏与仏にある」（によって解明される）（において実現する）と理解するようである。それは、「［現に］存在しているものが真実の在り方なのである、［現に］存在しているものを離れて真実の在り方を求めてはならない」ということは、「仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることの実証が実現しているのである。仏道修行を離れて、仏であることの実証を求めてはならない」ことを意味している、と言うのだろう。

漢訳『法華経』の「諸法」も、たとえば、「巧説諸法」と言われ、仏が説く教え、仏としての生き方ないし在り方を意味することがある。サンスクリット語テキスト（サッダルマプンダリーカ）（『正しい教えの白蓮』）の現代語訳(4) でも、時には「教え」、時には「現象」と一定しない。サンスクリット語テキストの当該箇所には、「十如是」も、「諸法の実相」の「実相」に対応する表現もないとされる。また、漢訳『法華経』の「如是」（このような）に対応するサンスクリット語は、「どのような」を意味すると言う。これらから、ここは、「仏だけが仏の教え（生き方、在り方）が何であるか、如何にあるか、何に似ているか、どのような特徴があるか、どのような本性を持っているか等々を知っている」と言っていたと推察される。ヴァスバンドゥー（世親）（4世紀）釈『法華経論』の「何等法、云何法、何似法、何相法、何体法」は、古形を反映するようである。(5)

＊

［1-2-A］釈迦牟尼仏言、「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相、所謂諸法、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等」。

［1-2-B］釈迦牟尼仏は（『法華経』方便品に言うように）、「仏だけが仏のためにあることが、［現に］存在するものたちが真実の在り方であることを、究め尽くすことができるのです。［現に］存在するものたちと言うのは、このような（実相である）在り方なのです、このような（実相である）性、このような（実相である）体、このような（実相である）力、このような（実相である）作、このような（実相である）因、このような（実相である）縁、このような（実相である）果、このような（実相である）報、このような（実相である）本末究竟等なのです」、と言われました。

［1-2-C］「唯仏与仏は諸法実相なり、諸法実相は唯仏与仏なり」(1-3)、「唯仏与仏と出現於世するは、諸法実相の説取なり、行取なり、証取なり。その説取は、乃能究尽なり」(1-4) 等の示唆を先取して、「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相」を、「唯仏が与仏である

ことが、諸法が実相であることを、究め尽くすことができる」と読んでおく。

仏教用語に限定しなければ、「相」は在り方（現象、すがた、かたち）、「性」は性質（性格、本性）、「体」は働きが起こる当のもの（基体、身体）、「力」は働く力、「作」は働き、「因」は働きを及ぼす原因、「縁」は働きを及ぼさせる機縁、「果」は働きが及ぼされた結果、「報」は働き（行為）の主体における報い、「本末究竟等」は、「どこからどこまで」くらいの意味だろう。

＊

［1-3-A］いはゆる如来道の「本末究竟等」は、諸法実相の自道取なり。闍梨自道取なり。一等の参学なり、参学は一等なるがゆゑに、「唯仏与仏」は「諸法実相」なり。「諸法実相」は「唯仏与仏」なり。「唯仏」は「実相」なり、「与仏」は「諸法」なり。「諸法」の道を聞取して、一と参じ、多と参ずべからず。「実相」の道を聞取して、虚にあらずと学し、性にあらずと学すべからず。「実」は唯仏なり、「相」は与仏なり。「乃能」は「唯仏」なり、「究尽」は「与仏」なり。「諸法」は「唯仏」なり、「実相」は「与仏」なり。諸法のまさに諸法なるを唯仏と称ず。「諸法」のいまし「実相」なるを「与仏」と称ず。

［1-3-B］ここに如来が言われた「どこからどこまで」とは、［現に］存在するものたちが真実の在り方であることがみずからを言う言葉なのです。指導者（如来、釈迦牟尼仏）がみずからを言われたのです。［どこからどこまで］等しく（修行の場に）参えて学ぶのです、（修行の場に）参えて学ぶのが［どこからどこまで］等しいので、「仏だけが仏のためにある」（唯仏が与仏である）ことが「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」ことなのです。「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」ことが「仏だけが仏のためにある」ことなのです。「仏だけ」が「真実の在り方である」のです、「仏のためにある」のは「［現に］存在するものたち」です。「［現に］存在するものたち」と言われるのをお聞きして、一つとか多くとか［区別］して（修行の場に）参えてはいけません。「真実の在り方である」と言われるのをお聞きして、虚しくない（真実である）と学んだり、本性でない（相・現象である）と学ぶようではいけません。「真実である」のは「仏だけ」です、［その］「在り方」（相）は「仏のためにある」です。「できる」のは「仏だけ」です、「究め尽くす」とは「仏のためにある」ことです。「［現に］存在するものたち」は「仏だけ」です、「真実の在り方である」とは「仏のためにある」ことです。「［現に］存在するものたち」がほかならぬ「［現に］存在するものたち」であるのを「仏だけ」と言っているのです。「［現に］存在するものたち」がまさに今「真実の在り方である」のを「仏のためにある」と言っているのです。

［1-3-C］「唯仏与仏、乃能究尽、諸法実相」を、「諸法実相は、唯仏与仏において究められる」（唯仏与仏が、諸法実相である）と読み、存在論的（実体論的）「諸法実相」（十如是）を、行為論的（生起論的）「唯仏与仏」へと接続する根拠を示そうとするようである。

「諸法」と言うのだから一つではなく多数なのだろうとか、「実相」と言うのだから永遠不変の本性なのだろう、などと考えてはいけない。「諸法」「実相」とか、「実」「相」と言うのだから「諸法」と「実相」、「実」と「相」は別のものだろう、などと考えてはいけない。「［現に］存在するものたち」がそのまま「真実の在り方」であり、「真実」（実在）と「在り方」（現象）が区別されるわけではないと言うようである。

なぜなら、「諸法」と「実相」の差異は、「唯仏」と「与仏」の差異だからである。それは、「仏道修行する行為」（唯仏）と、それと一つの出来事として生起する、「仏であることの実証」（与仏）との差異でしかない。「［現に］存在するものたち」（諸法）とは「仏だけ」（唯仏）と言っているのであり、「真実の在り方である」（実相）とは「仏のためにある」（与仏）と言っているのである、「真実である」（実）のは「仏だけ」（唯仏）で、その「在り方」（相）は「仏のためにある」（与仏）ことである。これを、修行の場に参えて学び、実証しなければならない、と言うのだろう。

＊

［1-4-A］しかあれば、「諸法」のみずから「諸法」なる、「如是相」あり、「如是性」あり。「実相」のまさしく「実相」なる、「如是相」あり、「如是性」あり。「唯仏与仏」と「出現於世」するは、「諸法実相」の説取なり、行取なり、証取なり。その説取は、「乃能究尽」なり。「究尽」なりといへども、「乃能」なるべし。初中後にあらざるゆゑに、如是相なり、如是性なり。このゆゑに「初中後善」といふ。

［1-4-B］ですから、「［現に］存在するものたち」みずからが「［現に］存在するものたち」である、「このような（実相である）在り方」があるのです、「このような（実相である）性質」があるのです。「真実の在り方」がまさしく「真実の在り方」である「このような（実相である）在り方」があるのです、「このような（実相である）性質」があるのです。「仏だけが仏のためにある」という仕方で「この世に出現する」のは、「［現

に］存在するものたちが真実の在り方である」と説いているのです、行(おこな)っているのです、実証しているのです。それを説くとは、「究め尽くすことができる」ことです。「究め尽くす」のですが、「できる」はずなのです。何時からとか何時とか何時までとか［の問題］でないので、このような（実相である）在り方なのです、このような（実相である）性質なのです。そういうわけで、「どの時でも善い」（実相である）と言うのです。

［1-4-C］仏がこの世に出現するのは、「仏だけが仏のためにある」（仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることの実証が実現しているのである、仏道修行を離れて、仏であることの実証を求めてはならない）という仕方で、「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」ことを説き、行(おこな)い、実証しているのである。「諸法は実相である」と言っても、「仏だけが仏のためにある」（仏道修行する仏と仏であることを実証している修行者の差異でしかない）ことなのだから、「諸法は諸法のままである」（諸法と別の実相になるわけではない）、「実相は実相のままである」（実相と別の諸法になるわけではない）、「そういう」（実相である）在り方（如是相）や性質（如是姓）があるという理解だろう。

＊

［1-5-A］「乃能究尽(ないのうぐうじん)」といふは諸法実相なり。「諸法実相」は如是相なり。「如是相」は乃能究尽如是性なり。「如是性」は乃能究尽如是体なり。「如是体」は乃能究尽如是力なり。「如是力」は乃能究尽如是作なり。「如是作」は乃能究尽如是因なり。「如是因」は乃能究尽如是縁なり。「如是縁」は乃能究尽如是果なり。「如是果」は乃能究尽如是報なり。「如是報」は乃能究尽本末究竟等なり。

［1-5-B］［唯仏与仏が］「究め尽くすことができる」（解明できる）（実現できる）と言うのは、「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」ことです。「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」のが「このような（実相である）在り方」なのです。「このような（実相である）在り方」が「このような（実相である）性質を究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）性質」が「このような（実相である）体(からだ)（基体）を究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）体(からだ)（基体）」が「このような（実相である）力(ちから)を究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）力」が「このような（実相である）働きを究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）働き」が「このような（実相である）原因を究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）原因」が「このような（実相である）機縁を究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）機縁」が「このような（実相である）結果を究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）結果」が「このような（実相である）報いを究め尽くすことができる」のです。「このような（実相である）報い」が「どこからどこまでを究め尽くすことができる」のです。

［1-5-C］「唯仏が与仏である」（仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることの実証が実現しているのである、仏道修行を離れて、仏であることの実証を求めてはならない）ことが「究め尽くすことができる」（解明できる）（実現できる）のは、「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」ことである。その意味で、「［現に］存在するものたち」の「在り方」、「性質」、「体(からだ)」（基体）、「力(ちから)」、「働き」、「原因」、「機縁」、「結果」、「報い」が「真実の在り方」（実相）なのである。それらは、［仏道修行する行為において、仏であることが実証される］同じ一つの出来事の異なる生起の仕方であり、そのあいだに実体的な区別はない（一等である）のだから、その「在り方」がその「性質」を、その「性質」がその「体」を、その「結果」がその「報い」を、その「報い」が「どこからどこまで」を「究め尽くすことができる」のである。たんに知的に解明し尽くすのではなく、「［現に］存在するものたち」が、「みずからの力量を発揮し尽くすことができる」（諸法がみずから諸法である）ことが、「そのものたちの真実の在り方」（実相がみずから実相である）である、と言うようである。

＊

［1-6-A］「本末究竟等(ほんまつくきようとう)」の道取、まさに現成(げんじよう)の如是なり。かるがゆゑに、果々の果は因果の果にあらず。このゆゑに、因果の果はすなはち果々の果なるべし。この果すなはち相・性・体・力をあひ罣礙(けいげ)するがゆゑに、諸法の相・性・体・力等、いく無量無辺も実相なり。この果すなはち相・性・体・力をあひ罣礙せざるがゆえに、諸法の相・性・体・力等、ともに実相なり。この相・性・体・力等を、果・報・因・縁等のあひ罣礙するに一任するとき、八九成(しん)の道(どう)あり。この相・性・体・力等を、果・報・因・縁等のあひ罣礙せざるに一任するとき、十成の道あり。

［1-6-B］「どこからどこまで」と言われているのは、まさに「このような」（実相）が実現していることです。ですから、結果の結果（果々の果）（究極の結果）は、原因の結果（因果の連鎖の途中の結果）ではありません。

ですから、原因の結果が、つまり、結果の結果である（果々の果に究極する）はずなのです。この結果（果々の果）が、つまり、在り方や性質や体（基体）や力をどれも蔵（内蔵）しているので、［現に］存在するものたちの在り方や性質や体（基体）や力等々が、どこまでも限りなく果てしなく真実の在り方なのです。この結果（果々の果）が、つまり、在り方や性質や体（基体）や力を蔵（隠）さないので、［現に］存在するものたちの在り方や性質や体（基体）や力等々が、どれも真実の在り方なのです。この［ような］在り方や性質や体（基体）や力等々を、結果や報いや原因や機縁等々がどれも蔵（内蔵）していることに依拠するとき、［「本末究竟等」という］簡潔な言葉（八九成の道）が言えるのです。この［ような］在り方や性質や体（基体）や力等々を、結果や報いや原因や機縁等々がどれも蔵（隠）さないことに依拠するとき、［「十如是」という］完璧な言葉（十成の道）が言えるのです。

［1-6-C］果々の果が因果の果を、「罣礙する」（蔵す）とともに、「罣礙しない」（隠さない）と言われる。「行為において生起する出来事（結果）が、行為（原因）と一つの出来事として生起している」と考えられているからだろう。「生起する出来事（結果）は、行為（原因）を、自分自身のうちに内蔵している（蔵している）（罣礙している）と同時に、その行為（原因）の力量を、自分自身のうちで実証している（隠していない）（罣礙していない）」と言うようである。行為（仏道修行）と出来事（仏であることの実証）、原因と結果は、実体的、時間的に区別されるものではない。この出来事の全体（本末究竟等）が、「果々の果」（究極の結果）という視点から捉え返されているのだろう。

＊

［1-7-A］いはゆる如是相は一相にあらず。如是相は一如是にあらず。無量無辺、不可道不可測の如是なり。百千の量を量とすべからず、諸法の量を量とすべし、実相の量を量とすべし。そのゆゑは、唯仏与仏乃能究尽諸法実相なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実性なり。 唯仏与仏乃能究尽諸法実体なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実力なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実作なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実因なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実縁なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実果なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実報なり。唯仏与仏乃能究尽諸法実本末究竟等なり。

［1-7-B］ここで言う「このような（実相である）在り方」とは一つの在り方ではありません。このような在り方［と言ってもそれ］は一つの「このような」ではありません。限りなく果てしなく、言い難く測り難い「このような」なのです。百とか千とかのレベルを量としてはいけません、［現に］存在するものたちのレベルを量としなければいけません、真実の在り方（実相）のレベルを量としなければいけません。なぜならば、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の在り方（実相）である」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の性質である」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の体（基体）である」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の力である」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の働きである」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の原因である」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の機縁である」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実の報いである」ことを究め尽くすことができるからです、「仏だけが仏のためにある」ことが「［現に］存在するものたちが真実のどこからどこまでである」ことを究め尽くすことができるからです。

［1-7-C］「唯仏が与仏である」（仏だけが仏のためにある）（仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることの実証が実現しているのである。仏道修行を離れて、仏であることの実証を求めてはならない）ことが、「諸法が実相である」（［現に］存在するものたちが真実の在り方なのである。［現に］存在するものたちを離れて、真実の在り方を求めてはならない）ことを究め尽くす（解明する）（実現する）ことができるのである。それは、「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」その仕方（真実の性質、真実の体（基体）、真実の力、真実の働き、真実の原因、真実の機縁、真実の報い、真実のどこからどこまで）すべてについて言えることである。

「十如是」の存在論的（実体論的）含意を制限し、行為論的（生起論的）な読替えを徹底しようとするようである。

＊

［1-8-A］かくのごとくの道理あるがゆゑに、十方仏土は唯仏与仏のみなり、さらに一箇半箇の唯仏与仏に

あらざるなし。唯と与とは、たとへば体に体を具し、相の相を証せるなり。また性を体として性を存ぜるがごとし。このゆゑにいはく、

「我及十方仏、乃能知是事」。

しかあれば、「乃能究尽」の正当恁麼時と、「乃能知是」の正当恁麼時と、おなじくこれ面々の有時なり。「我」もし「十方仏」に同異せば、いかでか「及十方仏」の道取を現成せしめん。遮頭に十方なきがゆゑに、十方は遮頭なり。ここをもて、実相の諸法に相見するといふは、春は花にいり、人ははるにあふ。月はつきをてらし、ひとはおのれにあふ。あるいは人の火をみる、おなじくこれ相見底の道理なり。

このゆゑに、実相の実相に参学するを仏祖の仏祖に嗣法するとす。これ諸法の諸法に授記するなり。唯仏の唯仏のために伝法し、与仏の与仏のために嗣法するなり。

このゆゑに生死去来あり。このゆゑに発心・修行・菩提・涅槃あり。発心・修行・菩提・涅槃を挙して、生死去来真実人体を参究し接取するに把定し放行す。これを命脈として花開結果す。これを骨髄として迦葉・阿難あり。

風雨水火の如是相すなはち究尽なり。青黄赤白の如是相すなはち究尽なり。この体・力によりて転凡入聖す、この果・報によりて超仏越祖す。この因・縁によりて、握土成金あり、この果・報によりて伝法附衣あり。

［1-8-B］このような道理であるので、仏の国土では「仏だけが仏のためにある」だけなのです、そのほか「仏だけが仏のためにある」のでない人は一人も半人もいません。（仏道修行する）「だけ」と（仏であることを実証する）「ため」とは、たとえば体（基体）に体（基体）をそなえ、在り方が在り方を実証することです。また性質を体（基体）として性質を考えるようなものです。そういうわけで（『法華経』法師品では）、

「わたし（釈迦牟尼仏）とあらゆるところの仏とが、このことを知ることができるのです」と言われるのです。

ですから、まさにあの（方便品の）「究め尽くすことができる」時と、まさにこの（法師品の）「知ることができる」時とは、同じように［仏道修行し、仏であることを実証して］有る時のそれぞれの一面なのです。もし「わたし」（釈迦牟尼仏）が「あらゆるところの仏」［のどれか］と同じであり［他のどれかと］異なるとすれば、どうして「あらゆるところの仏と」と言うことを実現させられるでしょう。［わたしが仏道修行し、仏であることを実証して有る］此処に「あらゆるところ」［の区別］はないのですから、「あらゆるところ」は［わたしが仏道修行し、仏であることを実証して有る］此処なのです。この意味で、「真実の在り方が［現に］存在するものたち［自分自身］と相い見えている」と言うのですが、［それは］「春が花に入る」、「人が春に逢う」［ことです］。月が月を照らし、人が自分に逢う。あるいは、人が火を見る［と言うの］も、同じように［自分自身と］「相い見える」道理［を言っているの］です。

だからこそ、真実の在り方が真実の在り方に（修行の場に）参えて学ぶことを仏祖が仏祖の法を嗣ぐことだとするのです。これは［現に］存在するものたちが［現に］存在するものたちに仏となりうる保証をしているのです。「仏だけ」が「仏だけ」のために法を伝え、「仏のために」が「仏のために」のために法を嗣ぐのです。

だからこそ、［仏道修行し、それと一つの出来事として、仏であることを実証する、という仕方で］生まれ死に、去り来たることがあるのです。だからこそ、［仏道修行の］心を発し、修行し、目覚め、涅槃に入ることがあるのです。［みずから］心を発し、修行し、目覚め、涅槃に入ることによって、「［仏道修行において］生まれ死に去り来たることが真実の人の体（基体）である」ことを（修行の場に）参えて究め、応接して、つかみ取り（生まれる）（来る）、手放す（死ぬ）（去る）のです。これを命のつなとして［仏道修行の］花が開き［仏であることを実証する］果実が結ぶのです、これを骨髄として［釈尊の法を嗣ぐ］迦葉や阿難がいるのです。

つまり、風や雨、水や火（諸法）のこのような（実相である）在り方を［唯仏与仏が］究め尽くすのです。つまり、青や黄、赤や白（諸法）のこのような（実相である）性質を［唯仏与仏が］究め尽くすのです。この（実相である）体（基体）や力によって凡庸な人を聖人に変えるのです、この（実相である）結果や報いによって仏を超え祖師を越えるのです。この（実相である）原因や機縁によって土を握って黄金に成すことがあるのです、この（実相である）結果や報いによって法を伝え仏の衣を附託することがあるのです。

［1-8-C］仏道修行するわたしが現にあるその在り方（諸法）において実証していることは、わたし自身が仏として行為できている（実相である）ことである。したがって、仏道修行するわたしが生きている世界とは、仏道修行することにおいて自分自身を実証している仏が生きている世界（仏土）である。そこでは、仏道修行しているわたし（仏）が、仏として行為できてい

ることを実証しているわたし（仏）自身に、「相い見えている」のである。（「人の火を見る」を「人の水を見る」とするテキストもあるようである。）仏でないものが仏であるものに「相い見える」のではなく、仏が仏に「相い見える」のであり、そこにあるのは「仏だけが仏のためにある」ことである。仏であるものが仏でないものに法を伝え、仏と成ることを保証するのではない。真実の在り方が真実の在り方自身に（修行の場に）参えて学び、［現に］存在するものたちが［現に］存在するものたち自身に仏と成ることを保証するという仕方で、仏が仏自身の法を嗣ぐのであり、仏自身の法を伝えるのである。

仏道修行する仏は、このような仕方で、仏として死に、仏道修行するものとして生まれるのである、仏道修行するものとして死に、仏として生まれるのである。仏として去り、仏道修行するものとして来るのである、仏道修行するものとして去り、仏として来るのである。このような生死去来が、仏道修行する仏の真実の在り方、真実の性質、真実の体（基体）、真実の力、真実の働き、真実の原因、真実の機縁、真実の結果、真実の報いなのである。実体的な或るものが去り実体的に別な或るものが来るのではない、自分自身が死に自分自身が生まれるのである。仏道修行するものが、仏として生まれ仏として死ぬのであり、仏として去り仏として来るのである、と言うようである。

『法華経』「見宝塔品」では、幾千万劫も前に入滅したはずの多宝仏が、その全身をおさめた宝塔から、釈迦牟尼仏が説く法華経を聴くために出現する。現在の仏（釈迦牟尼仏）が過去の仏（多宝仏）に法を説き、過去の仏（多宝仏）が現在の仏（釈迦牟尼仏）の法を聴くのである。また、「如来寿量品」によれば、釈迦牟尼仏の入滅（死）は方便であり、幾千万劫もの以前から仏として霊鷲山にとどまり、繰り返しこの世界に出現し（生まれ）て、仏道修行し仏と成って法を説いてきたのである。これらの神話的なエピソードを、仏道修行における生死去来の意味を考え直させるものとして、読み直そうとするのだろう。同じ一つの法が幾つもの世代をへだてて伝えられていく歴史がどうして可能なのか、仏でないものがどうして仏になることができるのか、仏となったはずのものがどうすればなお人間として生き続けられるのか、現に仏道修行しているところにしか仏であることの実証はないからではないか、と言うようである。(6)

＊

［1-9-A］如来道、「為説実相印」。

いはゆるをいふべし、為行実相印。為聴実性印。為証実体印。かくのごとく参究し、かくのごとく究尽すべきなり。その宗旨、たとへば珠の盤をはしるがごとく、盤の珠をはしるがごとし。

日月燈明仏言、「諸法実相義、已為汝等説」。

この道取を参学して、仏祖はかならず説実相義を一大事とせりと参究すべし。仏祖は十八界ともに実相義を開説す。身心先、身心後、正当身心時、説実性体力等なり。実相を究尽せず、実相をとかず、実相を会せず、実相を不会せざらんは、仏祖にあらざるなり。魔党畜生なり。

［1-9-B］如来（このように生死去来する人）は、「為説が実相の印なのです」と言われました。

ここに言われたことは、「［仏の生き方を］行う（行を為す）ことが真実の在り方の印なのです」、「［仏の生き方を］聴く（聴を為す）ことが真実の性質の印なのです」、「［仏の生き方を］実証する（証を為す）ことが真実の体（基体）である印なのです」と言わなければなりません。このように（修行の場に）参えて究め、このように究め尽くさなければいけません。その主旨は、たとえば珠が盤上を走るように、盤が珠の上を走るように［一つの出来事である］ということです。

日月燈明仏は、「［現に］存在するものたちが真実の在り方であることの意味は、すでにあなた方のために説いてあげました」と言われました。

このように［日月燈明仏が］言われたことを（修行の場に）参えて学んで、仏祖はかならず［現に存在するものたちが］真実の在り方であることの意味を説くことがもっとも大切なことだとしていると（修行の場に）参えて究めなければいけません。仏祖は十八の世界（六根六識六境）（諸法）（現に存在するものたち）がどれも真実の在り方であることの意味を開示し説いているのです。［この］身心をそなえる以前も、［この］身心をはなれたその後も、［この］身心をそなえているまさにこの時も、［現に存在するものたちが］真実の在り方、真実の性質、真実の体（基体）、真実の力等々であると説くのです。［現に存在するものたちが］真実の在り方［であること］を究め尽くさないなら、真実の在り方［であること］を説かないなら、真実の在り方［であること］を理解しないなら、［現に存在するものでない］真実の在り方［など］は理解しないのでなければ、仏祖ではありません。魔ものたちや、鳥や獣、虫や魚のたぐいです。

［1-9-C］「為説実相印」は、「ために実相の印を説く」（実相の印を説いてやる）読まれることがある。如来は「何が実相の印であるか」を語っているのだと考え

れば、「為説が実相の印である」（仏の生き方を説くことが真実の在り方をしている印である）と読むこともできるだろう。

「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」と言うとき、この「［現に］存在するものたち」とは、仏道修行し仏であることを実証するすべての行為ないし出来事（仏の生き方を説き、行い、聴き、実証すること）を意味すると言っている、という理解のようである。

＊

［1-10-A］釈迦牟尼仏道、「一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提、皆属此経。此経開方便門、示真実相」。

いはゆる一切菩薩は一切諸仏なり。諸仏と菩薩と異類にあらず、老少なし、勝劣なし。此菩薩と彼菩薩と、二人にあらず、自他にあらず。過現当来箇にあらざれども、作仏は行菩薩道の法儀なり。初発心に成仏し、妙覚地に成仏す。無量百千万憶度作仏せる菩薩あり。作仏よりのちは、行を廃してさらに所作あるべからずといふは、いまだ仏祖の道をしらざる凡夫なり。

いはゆる一切菩薩は一切諸仏の本祖なり。一切諸仏は一切菩薩の本師なり。この諸仏の無上菩提、たとひ過去に修証するも、現在に修証するも、初中後ともに「この経」なり。能属・所属、おなじくこの経なり。この正当恁麼時、これ此経の一切菩薩を証するなり。

［1-10-B］釈迦牟尼仏は（『法華経』法師品で）、「あらゆる菩薩（仏道修行している仏）のこの上ない正しい差別のない目覚め（無上正等覚）は、どれも［「諸法が実相である」と説く］この経（法華経）に属しているのです。この経は方便の門（存在するものそれぞれの存在の仕方にかなった入り口）を開いて、［現に存在するものたちが］真実の在り方［であること］を示しているのです」と言われました。

ここであらゆる菩薩（仏道修行している仏）と言っているのはあらゆる仏（仏であることを実証している修行者）のことです。仏たちと菩薩で類が異なっているわけではありません。どちらかが年長でどちらかが年少であったり、どちらかが優秀でどちらかが劣等であるのではありません。この菩薩とあの菩薩で、二人なのではありません、自他の違いもありません。過去のことでも現在のことでも未来のことでもありませんが仏を作す（仏であることを実証する）ことは菩薩の道を行う人（仏道修行している仏）がかならず為すこと（法儀）です。初めて［仏道修行する］心を発したときに［すでに］仏を成しているのです、［すでに］絶妙な目覚めの境域（妙覚地）で仏を成しているのです。限りなく百千万憶回も仏を作す菩薩がいるのです。仏を作した（仏であることを実証した）あとは、行い（仏道修行）をやめてもうしなくてもよいと言うのは、いまだに仏祖の道（生き方、歩み方）を知らない凡庸な人です。

ここであらゆる菩薩（仏道修行している仏）と言っているのはあらゆる仏（仏であることを実証している修行者）の本来の祖先のことです。あらゆる仏はあらゆる菩薩の本来の先生なのです。この仏たちのこの上ない目覚めは、たとえ過去に修行し実証されようと、現在に修行し実証されようと、未来に修行し実証されようと、［この］身［心］の以前（前世）に修行し実証されようと、［この身］心の後（来世）に修行し実証されようと、初めも、途中も、後も（時にかかわりなく）、［「諸法が実相である」と説く］「この経」なのです。属すのも、属されるのも、同じように「この経」なのです。まさにこの時、この経（仏の教え、生き方）（法華経）があらゆる菩薩［の力量を］を実証するのです。

［1-10-C］「一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提、皆属此経」を、「一切菩薩、阿耨多羅三藐三菩提は、みなこの経に属す」と読み、「阿耨多羅三藐三菩提」（この上ない正しい差別のない目覚め）を「一切諸仏」のものとすれば、「一切菩薩も、一切諸仏も（それぞれ独自の仕方で存在しているが）、ともにこの法華経に属する」と言っていることになるだろう。また、「一切菩薩の阿耨多羅三藐三菩提」と読んでも、本来「諸仏のもの」である阿耨多羅三藐三菩提が、「菩薩のもの」とされるのだから、「一切菩薩は一切諸仏と異ならない」と理解できるだろう。

「作仏」や「成仏」が、「仏でないものが仏になる」ことではなく、「仏が行為するように行為している（仏を作している）菩薩においてすでに仏であることが実現している（仏を成している）」ことであるとすれば、まず菩薩でありしかる後に仏であるのでも、仏になった後に菩薩でなくなるのでもないわけである。それを、菩薩とは仏を師とする（仏にならって行為する）人であり、仏とは菩薩を祖とする（菩薩の行為において実現する）人である、と言うのだろう。

＊

［1-11-A］経は有情にあらず、経は無情にあらず。経は有為にあらず、経は無為にあらず。しかあれども、菩提を証し、人を証し、実相を証し、此経を証するとき、「開方便門」するなり。方便門は仏果の無上功徳なり。法住法位なり、世相常住なり。方便門は暫時の伎倆にあらず、尽十方界の参学なり。諸法実相を拈じて参学するなり。この方便門あらはれて、尽十方界に蓋十方界するといへども、一切菩薩にあらざれば

その境界にあらず。

雪峰いはく、「尽大地是解脱門、曳人不肯入」。

しかあればしるべし、尽地尽界たとひ「門」なりとも、出入たやすかるべきにあらず。出入箇のおほきにあらず。「曳人」するにいらず、いでず。不曳にいらず、いでず。進歩のもの、あやまりぬべし。退歩のもの、とどこほりぬべし。又且いかん。人を挙して門に出入せしむれば、いよいよ門とほざかる。門を挙して人にいるるには、出入の分あり。

「開方便門」といふは、「示真実相」なり。「示真実相」は蓋時にして、初中後際断なり。その開方便門の正当開の道理は、尽十方界に開方便門するなり。この正当時、まさしく尽十方界を覿見すれば、未曾見の様子あり。いはゆる十方界を一枚二枚、参箇四箇拈来して、開方便門ならしむるなり。これによりて、一等に開方便門とみゆるといへども、如許多の尽十方界は、開方便門の少許を得分して、現成の面目とせりとみゆるなり。かくのごとくの風流、しかしながら属経のちからなり。

「示真実相」といふは、諸法実相の言句を尽界に風聞するなり、尽界に成道するなり。「実相」「諸法」の道理を尽人に領覧せしむるなり、尽法に現出せしむるなり。

しかあればすなはち、四十仏四十祖の無上菩提、みな「此経」に属せり。属此経なり、此経属なり。蒲団・禅板の阿耨菩提なる、みな「此」に属せり。拈花破顔、礼拝得髄、ともに「皆属此経」なり、此経之属なり。「開方便門、示真実相」なり。

[1-11-B]［「諸法が実相である」と説くこの］経（法華経）は情のあるものでも情のないものでもありません。［この］経は作為でも無作為でもありません。そうなのですが、［この経が］目覚めを実証し、［仏道修行する］人を実証し、［現に存在するものたちが］真実の在り方［であること］を実証し、この経［自身］を実証するとき、「方便の門を開く」のです。方便の門［を開くの］は［修行の］成果である仏のこの上ない力量の発揮です。［現に］存在しているものがそれぞれ独自の存在の仕方に住まっている（独自の仕方でそれぞれの力量を発揮している）のです。この世界の在り方はつねに［それ自身に］住まっている（実体的に別なものになるのではない）のです。方便の門［を開くの］はつかの間の技量ではありません、あらゆる世界を尽くし（修行の場に）参えて学ぶのです。「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」ことをとりあげて（修行の場に）参えて学ぶのです。この方便の門が現れ、あらゆる世界を尽くしあらゆる世界を蓋っているのですが、あらゆる菩薩でなければその境域にいないのです。

雪峰さんは、「大地はどこもかしこも［実体論的に区別する見方から脱け出る］解脱の門であるのに、人を曳きよせても入ろうとしないのです」と言っています。

ですからわかるはずです、どの地もどの世界もことごとく「門」であるとしても、出入りが簡単であるはずがありません。出入りする人は多くないのです。「人を曳きよせる」のですが入らないのです、出ないのです。曳きよせなくても入らないのです、出ないのです。歩みを進める人は間違ってしまうはずです、歩みを退く人はつっかえてしまうはずです。それではどうしたらいいのでしょう。人の方を門に入らせるなら、門はますます遠ざかってしまいます。門の方を人に入れるなら、出入りする力があります。

「方便の門を開く」というのは、「［現に存在するものたちが］真実の在り方［であること］を示す」ことです。「［現に存在するものたちが］真実の在り方［であること］を示す」のはあらゆる時のことですから、初めと中頃とその後の区切りは断えているのです。この方便の門を開く、まさにその道筋は、あらゆる世界を尽くして方便の門を開くのです。まさにこの時、まさしくあらゆる世界を詳しく見れば、いまだかつて見たこともないような様子があります。いわゆるあらゆる世界のことごとくを［さらに］一枚も二枚も、三個も四個も持ってきて、方便の門を開かせるのです。これによって、［どの十方世界でも］等しく方便［の門］を開いているように見えるとしても、多様なあらゆる世界のことごとくが、それぞれに方便の門を開く力の一部を得て、独自の在り方（面目）で実現しているように見えるのです。このような流儀が、そのまま［「諸法が実相である」と説く］［この］経（仏の教え、生き方）（法華経）に属す力なのです。

「真実の在り方を示す」というのは、「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」という言葉を世界のいたるところで聞き取ることです、世界のいたるところで［仏の］道（生き方、歩み方）を達成するのです。「真実の在り方とは［現に］存在するものたちのことである」という道理をあらゆる人に領覧させるのです、［それを］［現に］存在するあらゆるものにおいて現出させるのです。

ですからつまり、（七仏から六祖慧能に至る）四十代の仏と（六祖慧能から七仏に至る）四十代の祖師たちのこの上ない目覚めは、すべて［「諸法が実相である」と説く］「この経」（法華経）に属しているのです。この経に属

すのです、この経が［無上菩提に］属するのです。この上ない目覚めである［坐禅の］蒲団や禅板も、すべて「これ」に属するのです。［釈迦牟尼仏が］花をつまみ顔をほころばせるのも、［慧可が］礼拝して［達磨の］髄を得るのも、どちらも「みなこの経に属す」のです、この経が［それらに］属するのです。［こうして］「方便の門を開いて、［現に存在するものたちが］真実の在り方［であること］を示している」のです。

［1-11-C］仏になることは特別の時、特別の処で生起する出来事ではなく、菩薩として行為しているすべての時、すべての処に、その門は開かれているのである。仏道修行する行為において生起するすべての出来事が、それ自身ですでに、そのものの真実の在り方を示している（仏であることを実証している）のである、と言うようである。

菩薩は菩薩と別のものである仏に成るのではない、菩薩（仏道修行している仏）と仏（仏であること実証している修行者）は、同じ一つの出来事の異なった生起の仕方である。「法住法位」（法は法の位に住まる）は、「［現に］存在するものたちは、（実体的に区別されるものではないが）、それぞれが独自の仕方で生起している出来事である」と言い、「世相常住」（世間の相は常に住まる）は、「出来事として生起している（実体的に別のものに変化したりしない）（常住である）ことが、現に存在するものたちの存在する仕方（世相）である」と言う、という理解なのだろうか。

ちなみに、漢訳の「是法住法位、世相常住」に対応するサンスクリット語テキストの現代語訳は、「教えの永続すること、教えの不変であること、また、この世において教えが常に存在して不動であること」である。これを、天台教学は、「これは（縁起する）法に固有（で不変）の住まり方、在り方である。世間のものの（生滅変化する）すがたも（縁起する法に固有で不変な止まり方、在り方として）常住である」と理解するようである。(4)(5)

「初中後際断」は「初時」と「中時」と「後時」の間が「断絶している」（切れている）（際断されている）というより、「初際」と「中際」と「後際」という「際の区別がない」（際が断えている）（実体的な区別がない）という意味で、「あらゆる時を蓋っている」ことだろう。『現成公案』(1233) では、「前後際断」と言われている。(7)

2 如浄における諸法実相

［2-1-A］しかあるを、近来大宋国杜撰のともがら、落処をしらず、宝所をみず。実相の言を虚説のごとくし、さらに老子荘子の言句を学す。これをもて、仏祖の大道に一斉なりといふ。また三教は一致なるべしといふ。あるいは三教は鼎の三脚のごとし、ひとつもなければくつがへるべしといふ。愚癡のはなはだしき、たとひをとるに物あらず。

かくのごとくのことばあるともがらも仏法をきけりと、ゆるすべからず。ゆゑいかんとなれば、仏法は西天を本とせり。在世八十年、説法五十年、さかりに人天を化す。「化一切衆生、皆令入仏道」なり。それよりこのかた、二十八祖正伝せり。これをさかりなるとし、微妙最尊なるとせり。もろもろの外道天魔、ことごとく降伏せられをはりぬ。成仏作祖する人天、かずをしらず。しかあれども、いまだ儒教・道教を震旦国にとぶらはざれば、仏道のふそくといはず。もし決定して三教一致ならば、仏法出現せんとき、西天に儒宗・道教等も同時に出現すべし。しかあれども、仏法は天上天下唯我独尊なり。かのときの事、おもひやるべし、わすれあやまるべからず。三教一致のことば、小児子の言音におよばず、壊仏法のともがらなり。かくのごとくのともがらのみおほきなり。あるいは人天の導師なるよしを現じ、あるいは帝王の師匠となれり。大宋仏法衰薄の時節なり。先師古仏、ふかくこのことをいましめき。

かくのごとくのともがら、二乗外道の種子なり。しかのごときの種類は、実相のあるべしとだにしらずして、すでに二三百年をへたり。仏祖の正法を参学しては、流転生死を出離すべしとのみいふ。あるいは仏祖の正法を参学するは、いかなるべしともしらざるおほし。ただ住院の稽古とおもへり。あはれむべし、祖師道廃せることを。有道の尊宿、おほきになげくところなり。しかのごときともがら所出の言句、きくべからず、あはれむべし。

［2-1-B］そうなのですが、このごろの大宋国のいいかげんな人たちは、肝心なところを知りませんし、宝の在処を見ないのです。「［現に存在するものたちが］真実の在り方［である］」という言葉を虚しい説であるかのようにし、そればかりか老子や荘子の言葉や文句を学んだりしています。これも仏祖の偉大な道と違いはないと言うのです。また三つの教えは一致するはずであると言います。あるいは三つの教えは鼎の三つの脚のようなもので、どのひとつでも欠ければひっくり

返ってしまうはずだ言うのです。愚かで癡(にぶ)いそのひどさは、くらべようもありもせん。

このように言う人たちも仏の法（教え、生き方）を聞いたものだと認めてはいけません。なぜかと言えば、仏の法は西方（インド）がもとです。［釈迦牟尼仏は］この世に八十年おられ、五十年法を説かれて、しきりに人間界や天上界の人たちを教化されたのです。「すべての人を教化し、もらさず仏の道に入らせようとした」のです。それ以来、二十八代の祖師たちが正しく伝えてこられたのです。この方々をその［仏道の］盛りとし、微妙で最も尊い方々として来たのです。仏道に外れた人たちや天上の魔物たちも、のこらず打ち負かされてしまったのです。仏を成し祖師を作された人間界や天上界の方々は数知れません。けれども、儒教や道教を中国にたずねなければ仏の道として足りないなどと言うことは、いまだかつて［聞いたことが］ありません。もし、どうしても三教一致なのであれば、仏の法が出現したときに、西方（インド）に儒教も道教も同時に出現したはずです。けれども、仏の法は天上でも天下でもただそれだけが尊いものなのです。［天上天下唯我独尊と言われて仏が出現された］あの時のことに思いをおよぼさなければいけません、［それを］忘れて思い違いをしてはいけません。三教一致という言葉は、［あの］小児の発した声におよびもつきません、仏の法（教え、生き方）を破壊するものたちです。このような人たちばかりが多いのです。あるものは人間界や天上界の人たちを導く先生として現れ、あるものは帝王の師範となりました。大宋国は仏法が衰退し軽薄になっている時なのです。わたしの亡くなられた先生である古(いに)しえの仏［如浄さん］（1162-1227）はこのことをふかくいましめておられました。

このような人たちは、二乗（仏教のうちでも声聞や独覚の小乗の教え）や外道（仏教でない教え）の種子(たね)です。そのような類(たぐい)の人たちは、［現に存在するものが］真実の在り方［であること］があるはずであることも知らないで、すでに二三百年を経てきたのです。「仏祖の正しい法を（修行の場に）参(まみ)えて学べば、［繰り返し］生れ死に流れ転じることを離れ出るはずだ」としか言わないのです。あるいは、仏祖の正しい法を（修行の場に）参(まみ)えて学ぶことが、どういうことかさえ知らないものが多いのです。ただ寺の住職になるためのお稽古くらいにしか思わないのです。あわれですね、祖師の道が廃れてしまっているのです。［仏の］道（生き方、歩み方）をそなえた尊い方々の、大変お嘆きになられることです。そのような人たちが発する言葉や文句を聞いてはなりません、あわれに思わなければなりません。

［2-1-C］「三教は一致する」とする説の批判である。「実相」について語ることを「虚説」（現実を遊離した空虚な説）だとしたり、老荘と同一視したりするのは、「諸法実相」を、「諸法の実相」と読んで、諸法と切り離されたところに「実相」を考えるからだろう。「［現に］存在するものが真実の在り方である」（諸法が実相である）（仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることが実証されている）ということは、仏法のみが教えることであり、それを儒教や道教と混同してはならない、如浄はこれを知っていた、と言うのである。

＊

［2-2-A］圜悟(えんご)禅師いはく、「生死去来(しようじこらい)、真実人体(しんじつにんたい)」。

この道取を拈挙(ねんこ)して、みづからをしり、仏法を商量すべし。

長沙いはく、「尽十方界、真実人体。尽十方界、自己光明裏」。

かくのごとくの道取、いまの大宋国の諸方の長老等、およそ参学すべき道理となほしらず、いはんや参学せんや。もし挙しきたりしかば、ただ赤面無言するのみなり。

［2-2-B］圜悟禅師（1063-1135）は、「生れ死に、去り来ることが、真実の人の体(からだ)（基体）である」と言われました。

このように言われたことを取りあげて、みずからを知り、仏の法（教え、生き方）を考えあわせなければいけません。

長沙さんは、「あらゆる世界がどれも真実の人の体(からだ)（基体）なのです、あらゆる世界がどれも自己の光明のうちにあるのです」と言われました。

このように言われたことを、今日の大宋国のそこかしこの長老たちは、いまだに（修行の場に）参(まみ)えて学ばなければいけない道理(ことがら)とも知らないのですから、まして［実際に］（修行の場に）参(まみ)えて学ぶものなどあるはずもありません。もし［これらの言葉が］取りあげられれば、ただ顔を赤らめて何も言えずにいるしかないのです。

［2-2-C］圜悟の「生死去来、真実人体」も、長沙の「尽十方界、真実人体。尽十方界、自己光明裏」も、『法華経』の「諸法実相」と別のことではないと言うようである。

仏道修行し、その行為において生起している出来事として仏である（真実の在り方をしている）ことを実証している人を「真実の人」（自己の光明を放っている人）と

すれば、その人を生かしているもの、そのひとの基体（体）をなしているのは、現に仏道修行しているその行為と、そこにおいて現に生起している出来事（生死去来、尽十方界、諸法）にほかならないと言うのだろうか。

＊

［2-3-A］先師古仏いはく、「いま諸方長老は、照古なし、照今なし。仏法道理不曾有なり。尽十方界等恁麼挙、那得知。他那裏也未曾聴相似」。

これをききてのち、諸方長老に問著するに、真箇聴来せるすくなし。あはれむべし、虚説にして職をけがせることを。

［2-3-B］わたしの亡くなられた先生である古しえの仏［如浄さん］は、「このごろの各地の長老方（寺院の住職）は、古しえを照らし見ることをしません、［そこから］今を照らし見ることをしません。仏の法（教え、生き方）の道理をかつて自分のものにしたことがないのです。あらゆる世界をこのように［真実の人の基体であると］取りあげることを、どうして知ることができるでしょうか。あそこでは［そんなことは］まるで聴いたこともないみたいなのです」と言われました。

これをお聞きしてから、各地の長老方に質問をしてみたところ、本当にこれを聴かれたことのある方々は多くありませんでした。あはれですね、虚しい説で長老の職をけがしているのです。

［2-3-C］「諸法実相」は、「諸法が実相である」（現に存在しているものたちが真実の在り方である）（仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることの実証が生起している）と言っているのである。仏法の核心が『法華経』に言うこの「諸法実相」にあることを理解している近来の人は、如浄のみである、と言うのだろう。

＊

［2-4-A］応庵曇華禅師、ちなみに徳徽にしめしていはく、「若要易会、祗向十二時中起心動念処、但即此動念、直下頓豁了不可得如大虚空、亦無虚空形段、表裏一如智境双泯、玄解俱亡、三際平等。到此田地、謂之絶学無為閑道人也」。

これは応庵老人尽力道得底句なり。これただ影をおうて休歇をしらざるがごとし。「表裏一如」ならんときは、仏法あるべからざるか。なにかこれ表裏。

また「虚空有形段」を仏祖の道取とす。なにをか虚空とする。おもひやるに、応庵いまだ虚空をしらざるなり、虚空をみざるなり。虚空をとらざるなり、虚空をうたざるなり。

「起心動念」といふは、心いまだ動ぜざる道理あり。いかでか十二時中起心あらん。十二時中には、心きたりいるべからず。十二心中に十二時きたらず、いはんや起心あらんや。動念とはいかん。念は動不動するか、動不動せざるか。作麼生なるか動、また作麼生なるか不動。なにをよんでか念とする。念は十二時中にあるか、念裏に十二時あるか、両頭にあらざらんときあるべきか。

「十二時中に祗向せば易会ならん」といふ、なにごとを「易会」すべきぞ。「易会」といふ、もし仏祖の道をいふか。しかあらば、仏道は易会・難会にあらざるゆゑに、南嶽・江西ひさしく師にしたがいて辦道するなり。

「頓豁了不可得」といふ、仏祖道未夢見なり。恁麼の力量、いかでか「要易会」の所堪ならん。はかりしりぬ、仏祖の大道をいまだ参究しきたらずといふことを。仏法もしかくのごとくならば、いかでか今日にいたらん。

［2-4-B］応庵禅師（1103-1163）は、ある時徳徽さんに示して、「もし容易に会得したければ、ただ四六時中［十二の時の中で］心が起こり念が動いているところに向かい、ただこの動いている念に即しなさい、［そうすれば］大いなる虚空のようでつかみ取ることができず、また［その］虚空には形がないことが、たちまち速やかに、からりと了解されることでしょう。表も裏も一体で、智るものとその対象の二つ［の区別］も泯び、玄い理もその理解もともに亡しなわれ、［過去・現在・未来の］三つの時の区別もないはずです。この境地に達した人を、学ぶべきことも絶え、為すこともない、道に閑た人と呼ぶのです」と言われました。

これはご老体の応庵さんが力のかぎりを尽くして言うことができた言葉です。これは［自分の］影を追って休むひまを知らないようなものです。「表と裏が一体である」ときは、［学んだり、行ったりすべき］仏の法（教え、生き方）はあるはずがないのでしょうか。なにが表でなにが裏なのでしょう。

また「虚空に形がある」を仏祖の言われたことだとするのです。なにを虚空とするのでしょう。思うに、応庵さんはまだ虚空を知らないのでしょう、虚空を見たことがないのでしょう。虚空をつかんだことがないのでしょう、虚空を打ったことがないのでしょう。

「心が起こり念が動く」と言うのですが、心はいまだ動いたことがないという道理があります。どうして十二の時の中［四六時中］に心が起こること［起こる心］があるのでしょう。十二の時の中に心が来て入るはず

がありません。十二の心の中に十二の時が来るのでもありません、まして心が起こること［起こる心］があるでしょうか。念が動くとはどういうことでしょう。念は動いたり動かなかったりするのでしょうか、動いたり動かなかったりはしないのでしょうか。動くとはどうすることですか、また動かないとはどうすることですか。なにを念と呼んでいるのでしょうか。念は十二の時の中にあるのでしょうか、念の中に十二の時があるのでしょうか、［念と時の］二つ［別のもの］ではない時があるはずなのでしょうか。

「ただ十二の時に向えば容易に会得できる」と言うのですが、どういうことを「容易に会得する」はずなのでしょう。「容易に会得する」というのは、もしかして仏祖の道（生き方、歩み方）のことを言っているのですか。それならば、［仏祖の道は］「会得し易い」のでも「会得し難い」のでもないので、南嶽［懐譲］さん（677-744）も江西［馬祖］さん（709-788）もながいこと師にしたがってその道（生き方、歩み方）に努めたのです。

「つかみ取ることができないことがからりと了解される」と言うのですが、仏祖の道（生き方、歩み方）を夢にも見たことがないのです。「容易に会得したい」人が、このような［仏祖の道を見る］力量をどうして担いきることができるでしょうか。そのことからもわかるでしょう、仏祖の大いなる道（生き方、歩み方）をまだ（修行の場に）参えて究めたことがないのです。仏の法（教え、生き方）がもしこのようなものであれば、どうして今日まで伝わることがありえたでしょうか。

［2-4-C］応庵は、心が起こり念が動くさまを見れば、それが虚空のように形がなくつかみ取れないことが分かる。そのようにして、知るものと知られるものの区別も、過去現在未來の区別も亡なわれる絶学無為の境地に到ってはじめて、仏法とは何かが理解されるとする。しかし、「表と裏が一体である」こと、「虚空に形がある」こと、それが、「仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることが実証されている」ことであることを見ていない。そのために、かえって、「［現に］存在するものたち（諸法）をはなれたところに真実の在り方（実相）を求める」（仏道修行を離れたところに、仏であることの実証を求める）（行為する「時」と別の出来事として「心」が起こると理解する）ことになるのである。大切なことは、仏祖の道を理会したりしなかったりすることではなく、その道（生き方、歩み方）で励むことである、と言うようである。

＊

［2-5-A］応庵なほかくのごとし。いま現在せる諸山の長老のなかに、応庵のごとくなるものをもとめんに、歴劫にもあふべからず。まなこはうげなんとすとも、応庵とひとしき長老をばみるべからざるなり。ちかくの人はおほく応庵をゆるす。しかあれども、応庵に仏法およべりとゆるしがたし。ただ叢席の晩進なり、尋常なりといふべし。ゆゑはいかん。応庵は人をしりぬべき気力あるゆゑなり。いまあるともがらは人をしるべからず、みずからをしらざるがゆゑに。応庵は未達なりといへども学道あり、いまの長老等は学道あらず。応庵はよきことばをきくといへども、みみにいらず、みみにみず。まなこにいらず、まなこにきかざるのみなり。応庵そのかみは恁麼なりとも、いまは自悟在なるらん。

いまの大宋諸山の長老等は、応庵の内外をうかがはず、音容すべて境界にあらざるなり。しかもかくのごとくのともがら、仏祖の道取せる実相は、仏祖の道なり、仏祖の道にあらずともしるべからず。このゆゑに、二三百年来の長老杜撰のともがら、すべて不見道来実相なり。

［2-5-B］応庵さんでさえこんなふうです。いま現在する諸山の長老（ご住職）方のなかに、応庵さんのようなものを求めても、どれだけの時がたっても会うことはできないはずです。目に穴があくほど探し求めても応庵さんに匹敵する長老を見つけることはできないはずです。最近の人は応庵さんを認めています。けれども応庵さんに仏の法（教え、生き方）がとどいているとは認めにくいのです。ただ修行の席の後進で［すが］、ほどほどの人だと言わなければなりません。なぜでしょう。応庵さんは人を知りうる気力があるからです。今いる方々は人を知るはずがありません、みずからを知らないからです。まだ達成していませんが応庵さんには道を学ぶことがあります、今の長老方には道を学ぶことがありません。応庵さんはよい言葉を聞いているのですが、耳に入らないのです、耳で見ないのです。目に入らないのです、目で聞かないのです。応庵さんはかつてはこんなふうでしたが、今はみずから悟られておられるのでしょう。

今の大宋国諸山の長老（ご住職）方は、応庵さんの内も外ものぞき見ることができません、［その人たちの］発する言葉もすがたもすべて［応庵さんの］境域にはないのです。このような人たちは、仏祖が言われた［現に存在するものが］「真実の在り方」［であること］が仏祖の［歩む］道（生き方）であるとも、仏祖の道でないとも知るはずがないのです。ですから、二三百年来のいい加減な長老方は、誰も［現に存在するものが］「真実の

在り方」［である］と言われて来たことを見ないのです。

［2-5-C］当時の中国諸山の住職たちは、だれ一人、「現に存在するものが真実の在り方である」（諸法が実相である）（仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることが実証されている）ことが、仏の［歩む］道（生き方）を語るものであることを知らない、と言うのだろう。

＊

［2-6-A］先師天童古仏、ある夜間に方丈にして普説するにいはく、

天童今夜有牛児、
黄面瞿曇拈実相、
要買那堪無定価、
一声杜宇孤雲上。

かくのごとくあれば、尊宿の仏道に長ぜるは実相をいふ。仏法をしらず、仏道の参学なきは実相をいはざるなり。

この道取は、大宋宝慶二年丙戌春三月のころ、夜間やや四更になりなんとするに、上方に鼓声三下きこゆ。坐具をとり、搭袈裟して、雲堂の前門よりいづれば、入室牌かかれり。まづ衆にしたがうて法堂上にいたる。法堂の西壁をへて、寂光堂の西堦をのぼる。寂光堂の西壁のまへをすぎて、大光明蔵の西堦をのぼる。大光明蔵は方丈なり。西屏風のみなみより、香台のほとりにいたりて焼香礼拝す。入室このところに雁列すべしとおもふに、一僧もみえず。妙高台は下簾せり、ほのかに堂頭大和尚の法音きこゆ。ときに西川の祖坤維那、きたりておなじく焼香礼拝しをはりて、妙高台ひそかにのぞめば、満衆たちかさなりて、東辺西辺をいはず。ときに普説あり、ひそかに衆のうしろにいりたちて聴取す。

大梅の法常禅師の因縁挙せらる。衣荷食松のところに、衆家おほくなみだをながす。霊山釈迦牟尼仏の安居の因縁、くはしく挙せらる。きくものなみだをながすおほし。

「天童山安居ちかきにあり、如今春間、不寒不熱、好坐禅時節也。兄弟如何不坐禅」。

かくのごとく普説して、いまの頌あり。頌をはりて、右手にて禅椅のみぎのほとりをうつこと一下していはく、「入室すべし」。

入室話にいはく、「杜鵑啼、山竹裂」。

かくのごとく入室話あり、別の話なし。衆家おほしといへども下語せず、ただ惶恐せるのみなり。

この入室の儀は、諸方いまだあらず。ただ先師天童古仏のみこの儀を儀せり。普説の時節は、椅子・屏風を周匝して、大衆雲立せり。そのままにて、雲立しながら、便宜の僧より入室すれば、入室をはりぬる人は、例のごとく方丈門をいでぬ。のこれる人は、ただもとのごとくたてれば、入室する人の威儀進止、ならびに堂頭和尚の容儀、および入室話、ともにみな見聞するなり。この儀いまだ他那裏の諸方にあらず。他長老は儀不得なるべし。他時の入室には、人よりさきに入室せんとす。この入室には、人よりものちに入室せんとす。この人心道別、わすれざるべし。

それよりこのかた、日本寛元元年癸卯にいたるに、始終一十八年、すみやかに風光のなかにすぎぬ。天童よりこのやまにいたるに、いくそばくの山水とおぼえざれども、美言奇句の実相なる、身心骨髄に銘じきたれり。かのときの普説入室は、衆家おほくわすれがたしとおもへり。この夜は、微月わづかに楼閣よりもりきたり、杜鵑しきりになくといへども、静閑のよなりき。

［2-6-B］亡くなられたわたしの先生である天童山の古しえの仏（如浄さん）は、ある夜、方丈（住職の居室）で一堂の僧に説かれて、

天童山に今夜牛がいて、
金色のお顔のゴータマさん、［現に存在するものが］真実の在り方［であること］をお取りあげ、
買いたくも、定価なしではどうにもできず、
一声する杜宇、孤れ雲の上。

と言われました。

こういうわけですから、仏（目覚めた人）の［歩む］道に通じておられる尊い方々は、［現に存在するものが］真実の在り方［であること］を語るのです。仏（目覚めた人）の法（教え、生き方）を知らず、仏の道（歩み方）を（修行の場に）参えて学ばない人は［現に存在するものが］真実の在り方［であること］を語らないのです。

このように言われたのは、大宋の宝慶二年（1226）丙戌の春三月のころのことで、夜間、ようやく午前二時になろうとするとき、［山の］上方に三度太鼓をうつ音がきこえました。［礼拝のための］坐具をとり、袈裟を搭けて、雲堂（雲水が寝起きする坐禅堂）の［東の］前門から出ると、［方丈に入って個人指導を受けられる］入室を告げる木の札がかけてありました。まず同輩たちにしたがって［説法のおこなわれる］法堂のそばに行きました。法堂の西の壁を経て、［その北側に位置する］寂光堂にいく西の階段をのぼりました。寂光堂の西の壁のまえを過ぎて、大光明蔵にいく西の階段をのぼりました。大光明蔵が方丈です。西の屏風の南から、香台のちかくまでいって焼香し礼拝しました。入室をまつ僧

たちがここに列をなしているにちがいないと思っていましたが、一人の僧も見えませんでした。妙高台（住職の座）には簾がおりていて、ほのかに住職の大和尚の法（仏の教え、生き方）を説く声がきこえました。そのとき四川省出身の維那（リーダー）の祖坤（そこん）さんが来られて、おなじように焼香し礼拝をおえられて、妙高台の方をしずかに見渡すと、その東側といわず西側といわず、あまたの僧がかさなり立っていました。そのとき一堂の僧に説話がありました。しずかに僧たちのうしろにはいってお聴きしました。

大梅山の法常禅師（752-839）が山に住まわれたいきさつを取りあげておられました。蓮の葉を身にまとったり松のみを食べられたりするところでは、多くの僧たちが涙をながしていました。霊鷲山（りょうじゅさん）で釈迦牟尼仏が［穀つきの麦を食べて］安居（合宿修行）されたいきさつを、くわしくお話しになられました、それを聞く多くのものが涙をながしていました。

「天童山も安居が近づいています、今は春、寒くもなく熱くもありません、坐禅には絶好の季節です。兄弟よ、どうして坐禅をしないわけがあるでしょう」。

このように一堂の僧に説かれて、さきの詩文が示されたのです。詩をおえられて、右手で禅椅子の右の方を一打ちして、「入室しなさい」と言われました。

入室のお話しに、「ほととぎすが啼き、山の竹が裂ける」と言われました。

このように入室のお言葉があり、別のお話はありませんでした。集まった僧たちは多くいましたが口をはさむ人もなく、ただ惶（かしこ）まり恐（おそれい）るばかりでした。

この入室の作法（スタイル）は、いまだどこにもありません。今は亡きわたしの先生、天童山の古（いに）しえの仏（如浄さん）だけがこのような作法でおこなったのです。一堂の僧に説かれる時は、椅子や屏風の周りをとりかこんで僧たちがむらがり立つのです。そのまま、むらがり立ちながら、適宜の僧から入室し、入室をおわった人は、いつものように方丈の門から出ていくのです。残った人は、ただそのまま立っているので、入室する人の作法（マナー）、足の運び、さらに住職和尚の姿、振る舞い、また入室のお話し、すべてみな見聞きできるのです。こういうやり方はまだ此処以外どこにもありません。他の長老（住職）方にはこんなやり方はできないのです。別の時の入室では、人よりさきに入室しようとします。この［如浄さんの］入室では、人よりあとに入室しようとするのです。人の心の行き方のこの違いをわすれてはいけません。

それから今、日本の寛元元年（1243）癸卯（みずのとう）にいたるまで、あわせて十八年、［日がのぼり吹く］風と光［輝く草や木］のなかにすみやかに過ぎました。天童［山］からこの山（吉峰寺）にいたるまで、どれほどの山水［をたどるべき］かわかりませんが、［現に存在するものが］真実の在り方［であること］を語る［あの］美しい言葉と奇（たぐいまれ）な句を、身心骨髄に刻み込んできました。あの時の一堂の僧への説話と［個別の］入室は、多くの僧が忘れがたく思っています。その夜は、かすかな月がわずかに高殿（たかどの）からもれてきて、ほととぎすがしきりに啼いていましたが、静かでおだやかな夜でした。

［2-6-C］ゴータマはインドの姓で「もっとすぐれた牛」を意味する。ゴータマ・シッダールタが釈迦牟尼仏の俗名である。「安居も近づき、坐禅に絶好の時期である」天童山にいる「牛（ゴータマ）」は、「仏道修行する仏」を意味するのだろうか。

［現に存在するものたちが］「真実の在り方」［であること］は、それとは別なものを対価として実現されるのではなく、「仏道修行する行為（杜鵑啼）と一つの出来事として、仏であることの実証（山竹裂）が生起している」だけである、と言うのだろうか。

＊

［2-7-A］玄沙院宗一大師（げんしやそういつ）、参次聞燕子声云（さんじもんえんすしようううん）、「深談実相（じんだんじつそう）、善説法要（ぜんせつほうよう）」。下座（げざ）。

尋後有僧請益曰（じんごゆうそうしんえきわつ）、「某甲不会（むこうふうい）」。

師云（しうん）、「去（こ）、無人信汝（むじんしんにょ）」。

いはゆるの「深談実相（じんだんじつそう）」といふは、燕子（えんす）ひとり実相を深談すると、玄沙の道（どう）をききぬべし。しかあれども、しかにはあらざるなり。「参次」に「聞燕子声（もんえんすしよう）」あり。「燕子」の「実相」を「深談」するにあらず、玄沙の実相を深談するにあらず。両頭にわたらざれども、正当恁麼、すなはち深談実相なり。

しばらくこの一段の因縁を参究すべし。「参次」あり、「聞燕子声」あり、「深談実相、善説法要」の道取あり、「下座」あり。「尋後有僧請益曰（じんごゆうそうしんえきわつ）、某甲不会（むこうふうい）」あり。「師云、去、無人信汝（むじんしんにょ）」あり。

「某甲不会」、かならずしも請益実相なるべからざれども、これ仏祖の命脈なり、正法眼蔵の骨髄なり。

しるべし、この僧たとひ請益して「某甲会得（ういて）」と道取すとも、「某甲説得（せつて）」と道取すとも、玄沙はかならず「去、無人信汝」と為道すべきなり。会せるを不会と請益するゆゑに、「去、無人信汝」といふにはあらざるなり。まことに、この僧にあらざらん張三李四なりとも、諸法実相なりとも、仏祖の命脈の正直（しようじき）に通ずる時処には、実相の参学、かくのごとく現成するなり。青原の会下（えげ）に、これすでに現成せり。

しるべし、実相は嫡々相承の正脈なり。諸法は究尽参究の唯仏与仏なり。唯仏与仏は如是相好なり。

正法眼蔵第四十三

爾時寛元元年癸卯九月日于在日本越州吉峰寺示衆

［2-7-B］玄沙院の宗一禅師（835-908）は、（修行の場に）参え［て話され］たとき、燕の声を聞かれて、「深談実相、善説法要」と言われ、座を下がられました。

これを受けて「わたしが分かるのではないですね」と言って教えをうながす僧がいました。

先生は、「［あなたも］下がってください、誰でも無い人［わたし］があなたを信じます」（無人が信汝です）と言われました。

ここで言われる「深談実相」とは、「燕がひとり真実の在り方を深く談じている」ことだと、玄沙さんの言葉を［ふつうは］聞くはずです。けれども、そうではないのです。「（修行の場に）参える次いで」に「燕の声を聞く」ことがあるのです。「燕」が「真実の在り方」を「深く談じる」のではないのです。玄沙さんが真実の在り方を深く談じるのではないのです。［燕と玄沙の］両方でもないのですが、まさにそのような（無人の参次、聞燕子声の）ときに、つまり「深談［があり、それ］が実相である」（深く談じるのが真実の在り方である）のです。

しばらくこの間のいきさつを（修行の場に）参えて究めなければいけません。「（修行の場に）参える次いで」があり、「燕の声を聞く」ことがあります、「深談実相、善説法要」（深く談じるのが真実の在り方である、善く説くのが法の要である）と言うことがあり、「座を下がる」ことがあるのです。「これを受けて、『わたしが分かるのではないですね』と言って教えをうながす僧がいる」ことがあります。「『［あなたも］下がってください、誰でも無い人［わたし］があなたを信じます』、と先生が言われる」ことがあるのです。

「わたしが分かるのではないですね」は、かならずしも［明示的に］「［現に存在するものが］真実の在り方［である］という教えをうながしている」のではありませんが、これが仏祖の命の脈なのです、正しい法の眼目（正法眼蔵）の骨髄なのです。

おわかりでしょう、この僧がたとえ教えをうながして「わたし［も］分かるのですね」と言っても、「わたし［も］説けるのですね」と言っても、玄沙さんは「［あなたも］下がってください、誰でも無い人［わたし］があなたを信じます」と言ってやらなければいけません。分かっているのに分かっていないと言って教えを求めているので、「行きなさい、あなたを信じる人は誰もいませんよ」と言っているのではありません。ほんとうに、この僧でなく張の三郎さんや李の四郎さんであっても、「［現に］存在するものたちが真実の在り方である」［こと］であっても、仏祖の命の脈がまっすぐに通じている時と処では、［現に存在するものが］真実の在り方［であること］を（修行の場に）参えて学ぶことが、このように（仏道修行する無人の出来事として）実現するのです。青原さん（-740）の門下（玄沙さん）で、これがすでに実現しているのです。

おわかりでしょう、［現に存在するものたちが］「真実の在り方」［であること］は、正しい継承者から正しい継承者へ［仏法が］承けつがれていく正しい［命の］脈なのです。「現に存在するものたち」［が真実の在り方であること］は、「仏だけが仏のためにある」［こと］が究め尽くし（修行の場に）参えて究めるのです、「仏だけが仏のためにある」［こと］は、「このような［諸法実相を究尽するという］［すぐれた］特徴」［をそなえているの］です。

『正法眼蔵』、第四十三巻

時に、寛元元年（1243）癸卯九月日、日本国越州吉峰寺において修行者たちに示した

［2-7-C］「深談実相」を、燕や玄沙が「実相を深く談じる」と読んではいけない、と言われる。だとすれば、それは、「深談が実相である」（深く談じるのが真実の在り方である）と読み、「実相（無人）が深談している」と理解するのだろうか。「善説法要」も、「善説が法要である」（善く説くのが法の要である）と読み、「法要（無人）が善説している」と理解するのだろうか。

「去、無人信汝」も、僧が、分かっているのに、「分からない」と言うので、玄沙が「行きなさい、誰もあなたを信じません」と叱っているわけではない、と言われる。だとすれば、僧が、「わたしが分かるのではないのですね」と言うのに対して、玄沙が、「［あなたも］下がってください、誰でも無い人［わたし］があなたを信じます」（無人が信汝です）と確認し合っている、という理解なのだろうか。この僧のところでも、張三李四のところでも、諸法が実相であるところでも、諸法が実相であることを学ぶのは、このように（仏道修行する無人の出来事として）実現するのだから、僧が、「わたし［も］分かるのですね」と言っても、「わたし［も］説けるのですね」と言っても、玄沙は、「［あなたも］下がてください、誰でも無い人［わたし］があなたを信じます」と言うべきである、と言うのだろうか。

「諸法が実相である」（現に存在するものたちが真実の在り方である、現に存在するものを離れて真実の在り方を求めて

はならない）ことが仏法（仏の教え、生き方）の核心である、その意味を解明できるのは、「仏だけが仏のためにある」（仏道修行するところに、それと一つの出来事として、仏であることの実証が実現している、仏道修行を離れて、仏であることの実証を求めてはならない）ことだけである。それが結論である、と言うようである。

注・参考文献

１）矢島忠夫、正法眼蔵『仏性』（上）、弘前大学教育学部紀要101、2009

２）テキストは、道元『正法眼蔵』第二巻、水野弥穂子校注、岩波文庫、1990.（「ふりがな」は新仮名遣いにあらため、また、煩瑣にならないように努めた。）

３）現代文は、①道元禅師全集第５巻、『正法眼蔵』5、水野弥穂子訳注 、春秋社、2009、②道元『正法眼蔵』第５巻、増谷文雄訳訳注、講談社学術文庫、2005、③『正法眼蔵を読む』５、春日佑芳訳注、ペリカン社、2000、を参照した。

４）『法華経』上、方便品、坂本幸男・岩本裕訳注、岩波文庫、1993.

５）矢島忠夫、『法華経』における『諸法実相』、弘前大学教育学部紀要93、2005

６）矢島忠夫、正法眼蔵『有時』、弘前大学教育学部紀要104、2010

７）矢島忠夫、正法眼蔵における「前後際一断」、弘前大学教育学部紀要89、2003

８）仏教用語は、中村元『広説佛教語大辞典』、東京書房2002を参照した。

（2011. １.18受理）